



TITLE:

静脩 Vol. 29 No. 4 (1993.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 29 No. 4 (1993.3) [全文]. 静脩 1993, 29(4)

ISSUE DATE:

1993-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66007>

RIGHT:



過渡期に立つ大学図書館

ー日米ワンデイセミナーの印象ー

附属図書館長

朝 尾 直 弘

1) セミナーの経緯

昨年10月12日、本学附属図書館が事務局となって、日米の大学図書館関係者が京都外国語大学森田記念講堂に会し、セミナーを開いた。テーマは、つぎのとおりであった。

- 1) エレクトロニック・キャンパス
- 2) 学術情報の国際流通
- 3) 資料の保存
- 4) 図書館のサービスと著作権

アメリカ側の参加者は12名、日本側は全国の国公私立大学から300名以上が参加し、秋の1日、熱のこもった、密度の高い意見交換が行われた。

アメリカ側は、そのすこし前に東京でもよおされた第5回日米大学図書館会議に出席の代表団のうちから、東京会議の基調報告をおこなった全米図書館振興財団の会長デヴィッド・ペニマン博士が東京と同様に「図書館と学術情報流通」に関し講演したほか、4名が上記4テーマについてそれぞれ会議の報告をし、その外の代表も随時積極的に発言した。日本側はそれに対し、むしろ各大学の現場で働く職員から、テーマに即したさまざまな実践報告がなされ、それを会議に出席した図書館学の専門家たちがコメンテータとして、あいだをつなぐという方式で進められた。

セミナーの実行委員長として、自賛するのも憚られるが、1日という短い時間に、もりこみすぎ

のきらいはあったものの、おおむね所期の目標は達成されたといえるのではなかろうか。

このセミナーは、東京会議の準備過程で生まれた。日米大学図書館会議は、1969年に第1回を東京で開いて以来、不定期的にテーマを定め、日米交互に場所を替え開催してきたもので、75年の第3回は京都で開かれてもいる。今回は、「学術情報の国際的アクセス拡大のための日米協力ー21世紀をめざしてー」をテーマに、10月6日～9日東京大学山上会館を主会場として開かれた。ところで、会議の参加者は双方合計75名にかぎられており、それは緊密で徹底した討議のために必要な制約ではあったが、総会・分科会を含め10ある小テーマのなかには日本の大学図書館が日夜当面している共通の課題も多く、それらをできるだけ早く広く現場で苦勞している人々に知らせ、それぞれの職場で自分たち自身の問題として考えてもらうことが重要だという意見がだされた。このため、国公私立大学図書館協力委員会と、日本図書館協会大学図書館部会とが共同して、前者の内部に近畿地区の9大学から成る実行委員会を設置し、2つの組織の共催でテーマをしばらく、京都において参加自由のオープン・セミナーを開催することになったのである。

じつをいえば、後掲「事務局日誌」抄にみえるとおり、以上のことは私の館長就任以前にきまっ

ており、私はなにも知らずに、いきなりできたばかりの実行委員長にまつりあげられ、東京会議では議長だの報告だのと、主催者は気を遣ってくださったのであろうが、本人にはけっこうたびれる仕事を引き受けさせられるはめに立ちいたったのである。しかし、セミナーでは主催者でもあり、あいさつをすましたあとは素人の特権を行使して、勉強がてら討論をきかせてもらうことにした。

2) 「万人の窓」

ペニマン博士の基調講演は、図書館の将来ヴィジョンとして「万人の窓 (Universal Window)」の概念を提起した。これはすべての知的な関心を持つ人々が、みずから手で膨大な情報資源に接することを可能にする機構であり、システムともいべきものである。ここでは、利用者である人々は自分で情報をえらび、機器を利用し、かつ操作でき、自分で問題を解決する。そういう自立的な知識人を支援する機構が「万人の窓」である。「窓」の職員は、こうした利用者の高度な要求に対し、機敏にしかも弾力的に応じることのできる能力が要請される。現在あるものの不断の改良作業のうえにそこへ到達しようとするのなら、いちばん近いところにいるのが大学図書館である、というのが博士の主張であった。アメリカの主要大学での試みについての言及は、ほとんどが利用者である教員と職員とのさまざまな関係、協力形態の模索にさかれていた。

「万人の窓」は、一種の理想的な、未来社会論の性質を帯びた議論であって、その格調の高さはさすがと思わせるものがあつた。「21世紀の大学図書館はどうなるのか」、いま日本の各大学図書館が模索している問題に、ひとつの到達目標をさししめたものといえるのであろう。

近代以降、知識と情報の伝達を一手に担ってきたのは図書(本)であつた。その図書を収集・保管し、第一線の研究教育に利用できるようにするのが大学図書館の役目であつた。20世紀の末期になって、コンピュータを中心とする情報技術の急速な発達と情報媒体の多様化は、その様相を大きく変えようとしている。セミナーでも、電子文書の配送システムや、学術情報のネットワーク、そ

れらをささえる図書館と計算機センターとの協力など、現在の重要な課題のいくつかがとりあげられた。こうした方向に事態が進展して、情報資源の提供システムが整備されたあかつきには、利用者は図書館を介することなく必要な情報に接することができるようになる。ある理系の館長は、「パラパラめくり」の技術さえ開発されたら、もはや研究室のパソコンだけで自分の専攻分野の研究には十分だといった。「パラパラめくり」とは、本をパラパラとめくって必要な箇所を探しだすことで、人間の手と眼の共同作業のすばらしさを示している。いまのコンピュータでは無理だが、いずれできるようになるだろうというのである。理系も文系もふくめそうしたことが可能になったとき、図書館に代わって働くのが「万人の窓」である。



3) まだ見えぬルート

そのような理想形態に向けて、どのようにして到達するか、あるいはどのようにしたら到達できるかは、まだ明らかでない。セミナーの討論は、前途に越えなければならない未踏の山々が多く残されていると感じさせた。ひとことでいえば、議論が技術論に偏り、人間と情報の関係についてのバランスのとれた哲学にとぼしい。このため、目標までのルートがまだ見えてこない。

エレクトロニック・キャンパスにしても、図書の内容がすべてデータベース化され、その検索システムが整備されるというのは、ほとんど夢物語に近い。いまの図書館が実行している電算化とはそういうものではなく、大部分が旧来の図書館業務過程の省力化にすぎない。たとえば、カード検索がそれである。本学附属図書館では、目録カードの廻及入力に専任職員を配置しているが、年間

処理能力は1万冊に満たず、本学の蔵書冊数500万冊にくらべると気の遠くなる数字である。かりに、奇跡的な事態が起きて、21世紀には追いつけるとしよう。たぶん、そのときには利用者の検索システムに対する要求は、主題検索などに関し現在よりも高度になっていて、もはや役に立たなくなっているのではないか。かぎられた予算と、減っていく人員のもとで、なにを仕事の中心におくか。省力化とは異なったシステムづくりの戦略が必要であり、そのもとでのみ具体的に考えることができるように思われる。

内容面にわたるエレクトロニック・キャンパス創造への試みも、いくつか報告された。全文もしくは抄録データベース作成の要望は、国際的にもかなりつよく出されている。ここでは画像情報がとりあげられ、本学図書館の行なった電子ファイリングシステムによる画像情報の送信実験にも関心が寄せられた。すでに報告書に明らかにされているように、送信実験そのものは技術的に成功したが、本文・抄録の複製、オンラインサービスともに著作権法に触れる問題であり、図書館と著作者の間のライセンス契約が必要である。あらたな法改正も待たれるところがある。このため、実験は足踏み状態におかれている。ライセンス契約については、国レベルの集中的処理機構（複写権センター）がようやく緒につきはじめたけれども、いまのところ全体として、技術の発達に社会制度が追いついていない。

資料の保存に関しては、今回はもっぱら酸性紙の劣化問題や、貴重書の保存・利用がとりあげられた。ここで浮かび上がってくるのは、図書の文化財としての性質である。図書は情報伝達的手段であるとともに、人類の文化遺産の性質をもっている。現状は、新しく鮮度の高い情報をいかに正確にすみやかに伝達するかに重点がおかれている。しかし、人類の文化をかえりみた場合、普遍的知識となった情報、古くて価値ある情報の伝達がたいせつになってくる。それには、これらの電算化を推進することと並んで、もとの図書それ自体の文化財としての保存が要請されるであろう。たぶん、その部分では、図書館はいまの博物館に

似た機能をもって存続することになるのではなかろうか。

そのほか、いろいろと考えさせられるところの多いセミナーであった。他人さまに注文をつけるのは、自分の責任を棚にあげるようで気が引けるが、ルートの探索にさいしては、文系、とりわけ社会科学系の研究者が、もうすこしこの方面に力をさいて、教えてくださるとありがたいというのが率直な感想であった。

日米ワンデイセミナー開催が決まるまで

—「事務局日誌」抄—

平成2年2月7日

大学図書館国際連絡委員会（第24回）

- ・役員選出、副委員長館再任
- ・第5回日米大学図書館会議組織委員会を設置、京都大学は国立大学側委員として参加
- ・日米会議のほかにシンポジウム等の開催要請の提案

平成2年5月17日

第5回日米大学図書館会議組織委員会（第1回）

- ・日米大学図書館会議の日程、テーマ等を協議
- ・私立大学側がオープン参加の1日セミナーのような会議開催を要請
- ・国公私立大学図書館協力委員会等の組織で企画するなどの提案

平成3年6月20日

国公私立大学図書館協力委員会（第30回）

- ・日米ワンデイセミナー（仮称）開催のため実行委員会を関西地区に設置することを決定
- ・委員館は国公私立大各3館、計9館で構成

平成3年8月1日

京都大学がセミナー実行委員会委員館として東北大学と交代して参加

平成3年11月8日

セミナー実行委員会（第1回）

- ・役員互選、京都大学は主査代理
- ・日本図書館協会大学図書館部会と共催を要請

平成4年2月27日

日本図書館協会大学図書館部会長が、セミナーの名称に「第13回大学図書館研究集会」と併記することで、共催にすることを了承

御存知ですか？ 一文献複写サービスと他大学図書館の利用

附属図書館では、当館所蔵文献の複写サービスや、あいにく京都大学内には所蔵していない文献を利用者に提供するサービス（文献複写・現物貸借・他大学図書館利用案内）を行っています。他館所蔵文献の利用は、資源共有の理念による図書館間の相互協力によって成り立っています。以下、サービス内容をご案内します。

なお、特にことわらない限り、これらのサービスはメインカウンター⑥相互利用の窓口で受け付けます。

1. 文献複写

＜附属図書館に文献がある場合＞

電子複写

当館所蔵文献を電子複写される場合の複写料金は、1枚当り学内者：私費20円／校費15円、学外者：私費／校費35円です。なお、学内校費でご利用される場合は、部局から「京都大学文献複写利用書」または「複写用IDカード」をご持参下さい。

リーダープリンタ利用

当館所蔵マイクロ資料を閲覧または複写される場合は、3階雑誌・特殊資料掛で受け付けます。複写料金は、1枚当り学内者：私費20円／校費15円、学外者：私費／校費35円です。

貴重書・和装本撮影

当館所蔵貴重書および和装本を撮影される場合で、貴重書撮影をお申込みの際には、「貴重図書撮影許可願」の提出が必要です。

また、マイクロフィルム・印画紙引伸等、それぞれご指定の形態で複写できます。料金は国立大学文献複写料金規則によります。なお、製品ができ上がるまで1ヶ月程度かかります。

＜京都大学内他部局に文献がある場合＞

当該部局の図書館（室）を直接ご利用下さい。なお、利用方法が部局によって異なりますので、あらかじめお問い合わせ下さい。

＜京都大学内に文献がない場合＞

文献複写依頼（国内の大学等）

京都大学内に所蔵していない文献で、国内の大学および国立国会図書館等へ複写依頼される場合の申込みは、私費のみ受け付けています。校費については、部局図書室へお申込み下さい。所要日数は平均7～10日です。

お急ぎのときで、国立大学の受付図書館（主に中央図書館）が必要文献を所蔵している場合には、ファクシミリで複写物を取り寄せられます。ただし、送送料が1枚につき40円加算されますが、9枚以下の場合は速達便より安く利用できます。

文献複写依頼（国外の大学等）

日本国内に所蔵していない文献で、国外の大学および各国中央図書館等へ複写依頼される場合の受付は私費のみで、利用者負担です。内訳は複写料・送料・手数料です。所要日数は数ヶ月かかります。

2. 現物貸借

現物貸借依頼（国内）

京都大学内に所蔵していない図書で、国立大学および国立国会図書館等に所蔵が確認され、借用を希望される場合の受付は、原則として国立大学図書館間のみです。ただし、京都市内の大学については、利用者の訪問利用となります。

また雑誌、参考図書等貸出制限のあるものは借用できませんので、文献複写をご利用下さい。相手館により現物貸借のできない場合もあります。送料は利用者負担です。また校費で送料を支払わ

れる場合は切手をご持参下さい。

現物貸借依頼（国外）

日本国内に所蔵していない図書で、国外の大学等に所蔵が確認された場合には、借用を申し込むことができます。ただし、相手館により現物貸借のできない場合があります。送料・手数料・保険料は私費のみで利用者負担です。

3. 他大学図書館利用案内

国立大学図書館間共通閲覧証の発行

教職員・院生・研修員・学振研修員等（学部生

を除く）の方で他大学を訪問利用される場合、共通閲覧証を発行します。利用範囲は国立大学（98校）、近畿地区公立大学（11校）、大学共同利用機関等（17機関）で、閲覧利用ができます。発行は原則として翌日です。

紹介状の発行

学部生の方で他大学を訪問利用される場合や、上記の利用範囲以外の大学等を訪問利用される教職員・院生・研修員・学振研修員等の方に紹介状を発行します。発行は原則として翌日です。

（相互利用掛）

資料紹介

本学教官等の寄贈図書を紹介します。

本学の教官等より附属図書館が平成4年8月半ばから平成5年1月末までに寄贈を受けた資料を紹介します。寄贈者の方々に紙上よりあらためてお礼申し上げます。

寄贈者名	書名
宮崎市定	宮崎市定全集 7, 9, 15, 20, 22 '92-'93
岡崎文彬	ヴォー・ル・ヴィコント春秋：魅惑の フランス庭園 '92
太田武男	福祉と家族の接点：明山和夫先生追悼 論集 '92
大塚哲也	痛みのマネジメント 慢性疼痛症候 群 '92 老年者の機能評価と維持 '91 リハビリテーション必携 改訂3版 '85
楠 幸男	現代の古典 複素解析 '92 (以上名誉教授：退官順)
井村裕夫	生命のメッセンジャーに魅せられた人 びと：内分泌学の潮流 '92 柏祐賢著作集 全25巻 '85-'90
奥田昌道	債権総論 増補版 '92
岩井吉彌	ヨーロッパの森林と林産業 '92

松本 澄	Organic Synthesis at High Pressures '91
梅谷重夫	Solvent Extraction 1990 : Proceedings of the International Solvent Extraction Conference (ISEC'90) Part A,B '92

文学部言語学教室

西夏語研究を顧みて：西田龍雄教授退
官記念講演 '92

法学部附属国際法政文献資料センター

アメリカ政府官報の調べ方：Federal
Register System とは何か '92

人文科学研究所

中国国民革命の研究 狭間直樹編 '92
慧超往五天竺國傳研究 桑山正進編
'92

第6回国際生物学賞記念シンポジウム組織委員会

Perspectives in Neuroethology : The
Symposium on Neuroethology and
Behavior '92

(図書受入掛)



お知らせ

図書館利用証を発行します

図書館利用証（利用者カード）は、附属図書館（中央図書館）及び総合人間学部図書館の利用に際して、入館及び図書貸出の際に使用します。利用証は身分証（学生証）の有効期限に準じて作成しますので、学部新生の場合は、医学部学生を除き、4年間有効です。

学部新生の利用証は、入学名簿に基づいて一括作成しています。入学書類に同封されている附属図書館の「利用案内」に、利用証交付申請書がはさんでありますので、必要事項を記入の上、附属図書館（中央図書館）に利用証を取りに来て下さい。

新大学院生（修士課程）の利用証も一括作成しています。附属図書館備え付けの利用証交付申請書に記入の上、利用証を受け取って下さい。

新生、新院生の利用証交付は、4月14日から開始の予定です。手続きの際には学生証の提示が必要です。

今年度から新規に在籍される方（職員・研修員・博士課程院生等）及び留年等により今年度も引き続き在籍される場合、利用証交付手続きは、身分証が出来てから、もしくは身分証の更新手続きが済んでからになります。

新しい身分証の発行、または更新手続きが事務的に遅れる場合は、在籍期間・身分を証明する事

務文書をもって、一時的に身分証に代わるものとして、図書館の利用、利用証の発行が可能です。

（資料運用掛）

CD-ROMの利用時間が延長されました

利用できる時間は次のとおりです。

月～金曜日 9:00～21:00

（昼休みも利用可、土曜日は休止）

なお、自由に利用できるソフトは以下のとおりです。その他のソフトの利用についてはメインカウンター⑦参考調査の窓口までお申し出下さい。

- ・ Bowker Books in Print Plus
- ・ Bowker Ulrich's Plus
- ・ 青山学院大学図書館蔵書目録（和書）
- ・ 青山学院大学図書館蔵書目録（洋書）
- ・ マイクロ資料目録（国文学研究資料館蔵）
- ・ 学術雑誌総合目録（学術情報センター）
- ・ 朝日新聞記事データベース（最新版のみ）

（参考調査掛）

外国雑誌センター購入雑誌が一部変更されます

附属図書館が外国雑誌センター館として購入している雑誌のうち、98タイトルが平成4年度限りで中止となり、平成5年度からは新たに64タイトルが購入されることになりました。詳細はメイン・カウンター⑤雑誌の窓口でお尋ね下さい。

（雑誌・特殊資料掛）

報 告

洋学資料展「江戸期における翻訳の世界」（平成4年度附属図書館展示会）報告

附属図書館では、平成4年12月1日（火）から12月9日（水）の土曜、日曜を除く7日間、本館展示ホールにおいて、平成4年度展示会を開催しました。今期は、平成3年10月に膳所藩（大津市）の洋学者、黒田殉廬（1827-92）のご子孫から寄贈を受けました資料の整理を終えたことから、殉廬の業績とその歴史的意義を展望するため、洋学資料展を開催しました。

今回の展示では、わが国で初めて「ロビンソン・クルーソー」を翻訳した黒田殉廬の関係資料を含む、江戸期の洋学資料について、西洋文明を伝えた原書とそれらを翻訳、引用したものを対照展示することにより、異文明と伝統文明の間をつなぐ「翻訳の世界」を紹介しました。展示は、1)文法・辞書・事典、2)地理・旅行記・歴史、3)本草・博物・医学、4)窮理・兵学、5)黒田殉廬と漂荒紀事の五部門により構成しました。

展示物としては、世界に三点しか残っていない

マテオ・リッチの「坤輿万国全図」(1602)をはじめ、翻訳の中心となった前野良沢が、訳稿の出版を急ぐ杉田玄白と意見が合わず、学者の良心から自分の名を載せることを許さなかったという「解体新書」(1774)、この「解体新書」の原書で名古屋市立植物園が所蔵している、ターヘル・ア



ナトミアと呼ばれるクルムス「解体図表」オランダ語版(1734)、良沢のもとで他の門人達とともに、ボイセン「人体排泄論」全章の翻訳を完成させた江馬蘭斎の「五液診法」(1816)、長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフが通詞の協力を得て著した本格的な蘭和辞典「ドーフ・ハルマ」の初稿自筆本(高知県立追手前高校蔵)など、館内外の180点余りの貴重な資料が並べられました。

併設展では、わが国の儒学に大きな影響をおよぼした紙本墨書「孝經述義」、保元の乱に関するもっとも信憑すべき資料とされている紙本墨書「兵範記」の二点の重要文化財指定図書と、奈良絵本を展示しました。また、平成3年10月、鈴鹿

紀氏より寄贈を受け、同年12月本館の貴重書に指定されて、現在修補中の「鈴鹿本今昔物語集」を展示するとともに、重要文化財等の保存のしかたの一つである保存修理の修補過程を初めて一般公開しました。

展示会期中は連日盛況で、1,146名の入場者があり、ホールでは日ごろあまり眼にすることのできない資料に、入場者は熱心に見入っていました。12月4日(金)には、関西大学教授の宮下三郎氏による講演「洋学の科学史」が、本館A Vホールにおいて開催され、一般市民ならびに教職員、学生で会場は満席となりました。

なお、今回の展示会は、本館の所蔵資料だけでなく学内、学外の諸機関からも多くの貴重な資料を借用しました。これらの方々のご厚意とご協力により、このたびの展示会を開催することができましたことを、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。また、総合人間学部の松田清助教授には、短い準備期間にかかわらず、展示会開催の全般にわたり、ひとかたならぬご指導、ご援助をいただき、人文科学研究所の横山俊夫助教授には、開催企画について貴重な助言をいただきました。記して、深く感謝する次第です。

(雑誌・特殊資料掛)

平成5年度 図書館カレンダー

月	業 務 予 定	月	業 務 予 定
平成5年4月	1～5日 春季定例休館 9日 入学式 14日 新入生・新院生(修士課程) 図書館利用証交付開始	10月	
5月		11月	25日～ 冬季休暇中長期貸出開始 (書庫内図書:院生・教職員)
6月	1日～ 国立七大学間夏季帰省先図書館 利用申込受付開始 17日～ 夏季休暇中長期貸出開始 (書庫内図書:院生・教職員) 18日～ 創立記念日【休館】	12月	11日～ 冬季休暇中長期貸出開始 (開架図書:利用対象者全員) (書庫内図書:学部生) 25日～1月5日 年末年始 休館 ～1月9日 冬季休業
7月	3日～ 夏季休暇中長期貸出開始 (開架図書:利用対象者全員) (書庫内図書:学部生) 17日～9月12日 夏季休業 21日～9月10日 【夏季休業中土曜日休館】 夜間休館	平成6年1月	6～10日 夜間休館 11日～ 夜間業務開始 13日 冬季休暇中長期貸出返却日
8月	5～15日 夏季休館(蔵書点検等のため)	2月	28日 卒業予定者最終貸出日
9月	13日～ 夜間業務開始 20日 夏季休暇中長期貸出返却日	3月	1日～ 春季休暇中長期貸出開始 (書庫内図書:院生・教職員) 17日～ 春季休暇中長期貸出開始 (開架図書:利用対象者全員) (書庫内図書:学部生) 23日 学位授与式 24日 卒業式

★毎月末日は図書整理のため休館します。

☆上記日程に変更のある場合はその都度掲示でお知らせします。

図書館の動き

主題別研究集会の開催

近畿地区国公立大学図書館協議会の主催による平成4年度主題別研究集会が、平成4年12月18日に附属図書館A Vホールで開催されました。文部省学術国際局学術情報課の大山敬三調査官による「最近の計算機技術と図書館システム」と、本学総合人間学部のカール・ベッカー助教授による「研究者が望む大学図書館像」の講演があり、18大学から74名が参加しました。

附属図書館商議会の開催

附属図書館商議会(平成4年度第2回)が平成5年1月25日に附属図書館大会議室で開かれました。今回は、京都大学附属図書館商議会規程及び同利用規程等の一部改正、平成4年度実行予算等が討議されました。

鈴鹿紀氏に紺綬褒賞並びに賞杯を伝達

附属図書館所蔵「鈴鹿本今昔物語集」(9冊)

の寄贈者鈴鹿紀(おさむ)氏に平成4月10月31日付で贈られた紺綬褒賞並びに賞杯の伝達式が、平成4年12月22日に附属図書館応接室にて行われました。

研修への参加

今年度行われたおもな研修とその本学参加者は下記のとおりです。

大学図書館職員長期研修

7月13日～7月31日：図書館情報大学他

山田周治(附属図書館)

総合目録データベース実務研修(第1回)

9月21日～10月16日：学術情報センター

小川晋平(附属図書館)

目録システム講習会(地域講習会)

9月28日～10月2日：京都大学

秦野智世(附属図書館)

原 裕之(基礎物理学研究所)

藤田慶子(農学部)

森田和子(文学部)

目 次

<巻頭記事>

過渡期に立つ大学図書館

ー日米ワンデイセミナーの印象ー……………1

<資料紹介>

本学教官等の寄贈図書を紹介します……………5

<お知らせ>

図書館利用証を発行します……………6

CD-ROMの利用時間が延長されました……………6

外国雑誌センター購入雑誌が一部変更されます…6

<図書館の動き>

主題別研究集会の開催……………8

附属図書館商議会の開催……………8

鈴鹿紀氏に紺綬褒賞並びに賞杯を伝達……………8

研修への参加……………8

<その他>

日米ワンデイセミナー開催が決まるまで

ー「事務局日誌」抄ー……………3

御存知ですか?ー文献複写と他大学図書館

の利用……………4

洋学資料展「江戸期における翻訳の世界」

(平成4年度附属図書館展示会)報告……………6

図書館カレンダー……………7

後 記

各大学の館報を特色を見つけながら読むのが楽しみの1つでした。今度は編集にまわるとなると……むつかしいですね。(山)

氾濫と呼ぶべき出版点数肥大化の一方、館員から「本」の話を聞くことが少なくなったようです。「本」の情報誌「館報」をめざして。(松)